第8章　貝・海藻類

神田　正人

貝・海藻類

番匠川水系の貝類

はじめに

この報告は、以前に行われた「番匠川環境調査」の資料を参考に、最近の観察を加味して簡略にまとめたものです。

１　調査区域

番匠川の本流は本匠井の内地区までとし、支流は久留須川，井崎川、堤内川、大越川、堅田川、木立川の６支流です。支流の調査範囲は、本流に近い範囲にとどめました。

２　調査の方法

貝を採取するための特別な器具は用いなかった。水深数十㎝までの貝を目視により採取しました。２～３種の貝は方形枠を置いて個体数を数えました。

３　調査の結果

番匠川水系の貝は、西日本に分布する普通種で、特産種は棲息していませんでした。以下、種類ごとに棲息状況を概説します。

イシマキガイ

この貝は汽水性の貝ですが、淡水域にも逆のぼって棲息しています。本流では長瀬橋から上流に、支流では木立川、堅田川、井崎川にもいました。

カワザンショウガイ

この貝も汽水性の貝で、淡水域にはいませんでした。長瀬橋付近ではヨシや木片に多数着生していました。

タケノコカワニナ

汽水性の貝です。かつて汐月橋附近に多数いましたが、今は棲息の確認ができません。以前には、堅田川の柏江橋上流の小高い湿地に無数に群生していましたが、流水の管理がすすみ、年に何回かの増水で保たれていた湿地が乾燥して、この地点では絶滅しました。現在は柏江橋附近にわずかに生き残っています。大分県はこの貝を絶滅危惧種に指定しています。

カワニナ

おなじみの代表的な淡水貝で、番匠川水系に広く分布しています。棲息密度が最も大きかったのは小田の井堰で一平方メートルあたり 360 個でした。

サカマキガイ

ヨーロッパ原産の移入種で井崎川と久留須川で少数見られました。

モノアラガイ

汚水中にも生息するので、水質汚染の指標にされる貝です。本流の中流で、水田の水が流入する地点で数個体が見つかりました。また、堤内川、久留須川でも少数見かけました。

ドブガイ

大形の二枚貝で、木立の水門で見つけました。

ヤマトシジミ

汽水性の貝で食用にします。昔、番匠川は県内で有名な産地でしたが現在は激減しています。長瀬橋附近の水路や堅田川、木立川などでわずかに見かけました。

マシジミ

純淡水産で、かつて多産した本匠の風戸では、河川の改良などで土砂が移動し棲息が困難になりました。下流の鬼が瀬堰では、川底に設置した十字ブロックの間にわずかに棲息していました。また、久留須川の深瀬でも少数の棲息が認められました。

おわりに

貝の種類や棲息状況から、番匠川水系の水質は良好に保たれていると思われます。

イシマキガイ

カワザンショウガイ

タケノコカワニナ

カワニナ

サカマキガイ

モノアラガイ

ヤマトシジミ

ドブガイ

引用文献

建設省九州地方建設局佐伯事務所；1982　番匠川環境調査報告書　Ⅳ貝類調査

佐伯の海産貝類

１　少なくなった佐伯湾の貝

海岸の埋め立てや海水汚染などのため、磯物と言われるニイナ類やアサリなどは、昔に較べてずいぶん少なくなりました。また、底引き網漁業の不振とともに底生のイタヤガイなども不漁です。かつて潮干狩りでにぎわった興人の浜も、ハマグリは絶滅に近く、アサリなども少なくなりました。

２　黒潮に育まれて多様な蒲江の貝

蒲江でも海岸のニイナ類は減少傾向です。深島や屋形島の岩礁にいる貝も、刺し網で上がる種類や量が極めて少なくなりました。しかし、蒲江の貝を長年調査している、マリンカルチャーセンターの濱田 保氏が、蒲江産の貝として約 1300 種を発表し、蒲江の貝の種類の豊富なことが明らかになりました。

蒲江の海には温帯性の貝と共に、黒潮の影響を受けて暖海性、亜熱帯系の貝が多数棲息しています。暖海の指標として、タカラガイの数とイモガイの数が用いられますが、蒲江ではタカラガイ 42 種、イモガイ 41 種が記録され、両種が 40 種を越していることから蒲江の海は暖海の性質を示していると言えます。

ウミトサカなどに寄生するウミウサギガイ類が 52 種記録されていますが、一つの海域にこれほどの貝が生息するのは珍しいことで、蒲江の海のすばらしさを示していると言えます。

海の貝は色彩と模様、形の変化の妙などで多くの人を魅了します。わずかですが蒲江の貝の一部を写真で紹介します。

タツマキサザエ

ボウシュウボラ

センジュガイモドキ

ハナマルユキ

ウキタカラガイ

オカモトイモガイ

ウラシマイモ

ツリフネキヌヅツミ

ウミウサギガイ

ヒガイ

イチョウガイ

ホネガイ

サソリガイ

オオイトカケ

イトマキヒタチオビ

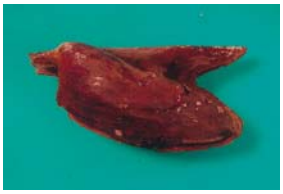
ベニオビショクコウラ

ルリガイ

ソメワケヘビガイ

フジタギリ

ツツガキ



ウグイスガイ

ショウジョウガイ

キンギョガイ

シュモクガイ

引用文献

濱田　保；2008、大分県産貝類目録・図譜　小野高速印刷　大分市

種類数では本邦一の陸産貝類

はじめに

陸産貝類とは陸に住む貝類のことで、カタツムリ類やキセルガイ類ナメクジなどのことです。

（表１）　軟体動物の分類表

	分類		なかま	すむところ
軟体動物	多板類		ヒザラガイ・ヒザガセ	海
	二枚貝類		アサリ・ハマグリ	海
			シジミ・ドブガイ	川や沼
	巻貝類	後鰓類	ウミウシ・アメフラシ	海
		前鰓類	アワビ・サザエ	海
			タニシ・カワニナ	川や沼
			ヤマタニシ・アズキガイ	陸上
		有肺類	マイマイ・キセルガイ・ナメクジ	陸上
	頭足類		タコ・イカ	海

大分県には約 150 種の陸貝がいますが、佐伯ではその 80%にあたる 120 種が記録されています。一つの市にこれほど多くの種が棲息している例は無く、佐伯は陸貝の種類数が国内一と言えます。そして、これは佐伯の自然環境が豊かに保存されているからです。

Ⅰ　主な調査地

1　上浦の石灰岩地域
2　狩生鍾乳洞周辺
3　城山
4　本匠の石灰岩地域
5　木浦の石灰岩地域
6　大島、7　沖黒島、8　屋形島、9　深島

Ⅱ　調査の方法

陸貝は湿気を好みますが、カビている所にはいません。ある程度の風通しがあり、木もれ日の当たる所などが棲息適地です。また、長期間人の手が加わっていないことも大事です。神社の森、自然林、海浜植物の繁茂する所などに調査の適地があります。

大形の貝は見つけやすいが、微小種は現地での直接採取は困難です。それで落ち葉をふるいにかけて落ちた腐葉土を持ち帰り、水洗、乾燥など適当な処理をして最後はルーペを用いて選別します。こうして得られた微小種は乾燥して保存しますが、大型の貝は肉抜きが必要です。最後に顕微鏡などを用いて種の査定をします。

Ⅲ　調査の結果

(1)　見かけることの多い普通種

山麓に近い住宅の裏では、最も大形のツクシマイマイを見かけることがあります。この貝は九州一円に分布している九州を代表する貝です。

これよりも少し小さいのはセトウチマイマイです。瀬戸内海沿岸に分布し、九州では主に大分県の南部に分布します。この貝は城山近くで住宅の庭木などに登っているのを見かけますが、樹上生活をするカタツムリです。殻のまわりにある黒い帯を色帯といいますが、セトウチマイマイでは色帯の無いものから１本、２本、３本とその数には変異があります。

殻の高いコベソマイマイは低木林の周辺や神社林でよく見かけます。野菜を食べるので嫌われるのはウスカワマイマイやオナジマイマイです。コハクオナジマイマイも菜園などにいます。この貝は薄い殻から黄色の内臓が透けて見えるので殻が黄色に見えます。

昔の人がタバコを吸うのに使用していた煙管（きせる）に似ている細長い貝はキセルガイの仲間です。庭木や朽ち木、シイタケのほだ木などにはシリオレギセルやスグヒダギセルが付いています。石垣や路傍でも見かけられるのはナミギセル（並～ふつうの）です。

山道を登っていると円いふたを持ったヤマタニシが転がっているように見つかります。

ナメクジも殻が退化しているが貝の仲間です。

以上に挙げた貝類はみな見つかりやすい大形や 中形の貝ですが、陸貝の大部分は小形や殻径が 1.4 ㎜のハリマナタネのような微小種です。

ツクシマイマイ

コハクオナジマイマイ

シリオレギセル

(2)　各調査地点の貝類相と特記される種

1　上浦の石灰岩地帯

採集例の少ないサドヤマトガイや普通種のキュウシュウゴマガイなど 38 種を記録しています。特記されるのは、長田の山のごく狭い範囲に棲息するミヤザキギセルです。この種は県内ではここだけで、宮崎県の北部にも分布しています。

サドヤマトガイ

キュウシュウゴマガイ

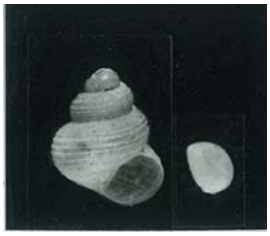
ミヤザキギセル

2　狩生鍾乳洞周辺

大型のツクシマイマイ、セトウチマイマイ、コベソマイマイなどは死殻でした。ここでは 42 種を記録したが大部分は微小種でした。

ゴマオカタニシや石灰岩地のみに棲息するクチマガリスナガイを記録しました。

また、スギモトギセルが少数いましたがこの貝は豊後水道の両側に分布し、特に鶴見半島には棲息地が多くあります。



ゴマオカタニシ

クチマガリスナガイ

スギモトギセル

3　城山

一般にコジイ林には陸貝が少ないと言われますが、城山ではこれまでにツクシマイマイ、スグヒダギセルなど 30 種を記録しました。

三の丸のツツジの植え込みの下にはナタネガイ、ヒメナタネガイなどが結構います。 涸れ池の近くには湿地性のケシガイが多数いました。

池のすぐ上の落葉の中からシリブトオカチョウジガイの死殻が見つかりました。この種は南方系で八重山諸島から鹿児島に分布しています。県内では風連鍾乳洞近くでの採集記録があるだけです。

「登城の道」を登っているとヤマタニシの死殻を見つけます。

壊れた砂防ダムの近くにキュウシュウゴマガイがいましたがやや変異した形で、今後の研究が必要です。

「独歩碑の道」の三合目附近で、路側にフウトウカズラの繁茂している所では、ミジンヤマタニシ、ハリマナタネ、ヒラベッコウなど 9 種を記録しました。

ケシガイ

シリブトオカチョウジガイ

ヤマタニシ

4　本匠の石灰岩地域

石灰岩地帯は陸貝の宝庫といわれます。貝が多い理由は、殻を作るのに必要なカルシウム分を得やすいことや、石灰岩が浸食をうけて表面に多くの凹凸をつくり、また窪地をつくることなど、貝の棲息に適した環境になっているからです。

本匠は陸貝の産地として全国的に知られ、これまでに 95 種を記録しています。ツクシマイマイ、セトウチマイマイ、オキギセル、オキモドキギセル、ホウヨギセルなど大形のものから、オオイタシロギセル、ヒメシロギセル、カワモトギセルなど中形のものなどがあ

り、その他は小形や微小種です。

オオイタシロギセルは豊後大野市三重町の石灰岩地で初めて発見されました。石灰岩地のみに生息し、本匠や木浦にいます。また宮崎県北部にも分布しています。ホウヨギセルは「豊予」の意味で主に大分と愛媛に分布しています。石灰岩地に固有なベニゴマオカタニシは九州では大分県のみに棲息しています。クチマガリスナガイも石灰岩地の固有種です。チョウセンスナガイは、九州では本匠だけにいます。ハナコギセルは神社境内のムクなどの大樹に着生する小形の希少なキセルガイです。堂の間では、境内のブッシュが取り除かれ整備されたために乾燥化がすすみ絶滅寸前です。本匠の固有種であるオナガラムシオイは小半鐘乳洞附近にいます。ヒメシロギセルも固有種です。3 カ所で見つけましたが、前高神社では参道の開通で日射、風通し、下草の植生など環境が変化して絶滅の恐れがあります。

近年ある洞附近で発見されたムシオイガイの一種はハブタエムシオイとして近く学会誌に発表される予定です。津久見の徳浦で発見されたシロヒメベッコウは本匠でも見つかっていますが、研究が進まず数十年間未発表のままです。

セトウチマイマイ

ホウヨギセル

ベニゴマオカタニシ

チョウセンスナガイ

ハナコギセル

オナガラムシオイ

ヒメシロギセル

オオイタシロギセル

5　木浦の石灰岩地域

オオヒュウガマイマイは人家の近くでも見かけられます。ツクシマイマイよりも更に大きいカタツムリです。ツクシマイマイの亜種と言われていましたが、現在はツクシマイマイの山地形とされています。

木浦の集落から藤河内に行く道路の開設で、千人真淵附近のタケノコギセルとオオイタシロギセルの生息地の一部が破壊されました。タケノコギセルはタケノコを思わせる細長い形で、宮崎の北部にも分布しています。杉ヶ越峠附近の林内落葉下には、南限分布と考えられるヤマキサゴがいます。また、ダコスタマイマイも見つけられます。倒木や落葉の下にはオキギセルやオキモドキギセルなど大形のキセルガイ類がいます。

タケノコギセル

ヤマキサゴ

ダコスタマイマイ

6　大島

賀茂神社の境内にあるアコウの根本にはアズキガイが付いていました。
また、附近のタブの木などにヒロクチコギセルがいました。この貝は沿海地の樹木に着生しています。地下から田の浦に行く道の路側に植えられたハマユウの下で、ホラアナゴマオカチグサ亜属の一種を数個採取したが、まだ専門家による研究がすすんでいません。もとの中学校近くの低木林内で見つけた、南方系のオキナワベッコウ属の一種カンダベッコウは、津久見の地無垢島と米水津の沖黒島に分布しています。

アズキガイ

ホラアナゴマオカチグサ亜属の一種

カンダベッコウ

7　沖黒島

この島では 23 種を記録しています。多くは本土と共通な普通種ですが、深島とは貝相を異にしています。キセルガイ類では、スグヒダギセルやスギモトギセル、ギュウリキギセルがいます。ギュウリキギセルは九州南部が主生息地です。北に 4 ㎞ほど離れた横島でも死殻を拾っています。灯台の手前のキク科植物の枯れた草むらにノミガイの群棲を見つけました。この貝は黒潮によって分布したと言われています。ガレ場ではカンダベッコウとカンダマイマイが採れました。カンダマイマイは 蒲江が原産地とも考えられる貝です。

ノミガイ

カンダマイマイ

8　屋形島

記録されたのは 43 種です。厳島神社付近の杉林や低木林の下でツクシマイマイ、ヤマクルマ、ウブギセル、微小なキバサナギガイなどが見つかります。集落の東端に近い海浜植物群落の下では、スナガイ、サツマムシオイ、クルマナタネなどが見つかります。州の鼻附近にはスナガイ、サツマムシオイ、ヒラシタラガイなどがいます。ヒラシタラガイも海流によって分布した種で沿海地だけに生息しています。ウブギセルはこの島だけに生息する固有種で、他に生息地はありません。

近年過疎化がすすみ耕地の荒廃などのため山麓にあるこの種の生息環境は極めて悪くなり、絶滅が心配されています。

ヤマクルマガイ

ウブギセル

キバサナギガイ

9　深島

ここでは 23 種を記録しました。多くは本土側と共通な普通種ですが、唯一フカシマコベソマイマイだけは例外で本土にはいません。この種は宮崎県北部の離島にも分布しています。集落に近いハマユウの下にはサツマオカチョウジガイが群棲していました。
また学校跡に行く山道の路側に堆積した落ち葉の下にはサツマムシオイの群棲が見られました。

フカシマコベソマイマイ

サツマムシオイ

ヒラシタラガイ

おわりに

佐伯に生息する陸産貝 120 種のうち 20 種が、環境省や大分県の絶滅危惧種に指定されています。移動する力が弱く、環境の変化に適応する力も弱い陸産貝類は、殆どの種が減少傾向にあり、中には絶滅寸前の種もあります。日頃は目にすることも少ないこれらの生き物を守るために、今後も自然環境の保護に努めてほしいものです。

参考文献

東　　正雄;1970　クチマガリマイマイ亜属の一新種、Venus 29(2;);59－63
東　　正雄,1972　大分県深島産コベソマイマイ亜属の一新亜種、Venus 30（4）144－146
東　　正雄 1978　大分県産オキナワベッコウ属の一新種　Venus　36（4）173－175
神田　正人 1978　大分県のキセルガイ　九州の貝（12）10－13
神田　正人 1985　日豊海岸地域の陸産貝類 in 日豊海岸国定公園学術調査報告書 121－
神田正人・多田昭 1974　大分県沖黒島の陸貝　やまきさご　13；1－13
神田　正人 1992　大分県陸産貝類誌　佐伯印刷　佐伯
黒田徳米　1954　九州産珍らしい新陸貝　ゆめ蛤（78）7－8
湊　　宏　1983　コベソマイマイとその近縁種について　南紀生物（25）28－33
湊 宏・多田昭　1978　ミヤザキギセルについて、九州の貝（11）11
湊 宏・多田昭　1978　日本産スギモトギセル（新種）とその地理的変異　Venus37（4）
湊 宏・多田昭　1979　九州の石灰岩地産キセルガイ科の 2 新種　Venus　38（3）
湊 宏・多田昭　1990　九州から採集されたオキモドキギセル（新種）Venus 49(1)

豊富な種類数を誇る佐伯の海藻類

はじめに

我が国の海藻の種類数は、およそ 1400 種と言われます。大分県では 440 種が記録され、全国的にみて海藻の多い県です。佐伯では 377 種の生育を確認しました。一つの市でこれほどの種が記録されることは珍しく、佐伯は国内で最も海藻の種が多い市と言えます。

Ⅰ　主な調査地点

１　蒲戸崎　２　佐伯市古江　３　興人の浜　４　大入島北部　５　鶴見梶寄
６　蒲江越田尾と波当津までの海岸　７　深島・屋形島

Ⅱ　調査の方法

１　調査の時期

海藻の種類や生育量には年による消長があり、また短期間に生育し消滅することもあって、調査には多年を要します。調査は年間を通して続けられるが、特に冬から初夏の間が生育の最盛期で調査の適期となります。

２　資料の収集と処理

刺し網にかかって上がる海藻が入手できれば､年間を通して収集できるので好都合です。また、干潮時の「磯採集」は海藻の生態も観察できる良い方法です。「打ち上げ採集」は磯採集で得られない深い所の海藻が採れることがあります。「潜水採集」は最も良い方法ですが、誰にでもできることではありません。

集められた資料は押し葉標本にして保存し種名の判定をします。海藻の種は判定が難しく、困難なものは専門の学者に依頼して種名に誤りの無いようにしました。

Ⅲ　調査の結果

１　海藻相の概要

佐伯湾沿岸の海藻相は、主に温帯性の種で構成されています。然し、瀬戸内海特産のイトヨレモクが湾内に分布していることや、日本海中部から長崎にかけて分布するウスバノコギリモクやフシスジモクが上浦と鶴見の沿岸に生育すること、また蒲江に多産する暖海性のシロコモクが大島や梶寄、蒲戸崎に生育することなどから、佐伯湾には瀬戸内海要素と共に、日本海要素も影響し、更に暖海的要素も加わって多様な海藻相を呈していると言えます。

一方、米水津・蒲江方面は、鶴見半島を境にして黒潮の影響を受けクサビガタハウチワ、タカツキズタ、キッコウグサ、イシハダ、カイメンソウ、マクリなど、暖海や亜熱帯に生育する種が多数見られ暖海的・亜熱帯的な海藻相を示しています。

２　各調査地に共通な普通種

緑藻類ではアオサと呼ばれているアナアオサが優占種として見られます。この種は藻体に多数の孔があるのですぐに分かります。食用にするアオサはヒトエグサで体が一層の細

胞からできているので薄くなっています。

細いリボン状のヒラアオノリやボウアオノリもアナアオサと混生しているので一見区別できません。

褐藻類では干潮のとき岩上にイワヒゲやイシゲ、イロロなどが見られます。浅場ではフクロノリ、ウミウチワそれにホンダワラ類のホンダワラ、ヒジキ、イソモクなどが着生しています。

紅藻類では、磯の最も高い位置にフクロフノリが、満潮時の水面の位置を示すように横一直線に群生します。浅場にはムカデノリやマクサ（テングサ）などが見られます。

このような磯場に見られる海藻は、種によって生育する場所がそれぞれ限られていて、磯の高いところから水中まで段々に棲み分けているように見えます。これを海藻の垂直分布と言います。（図１）

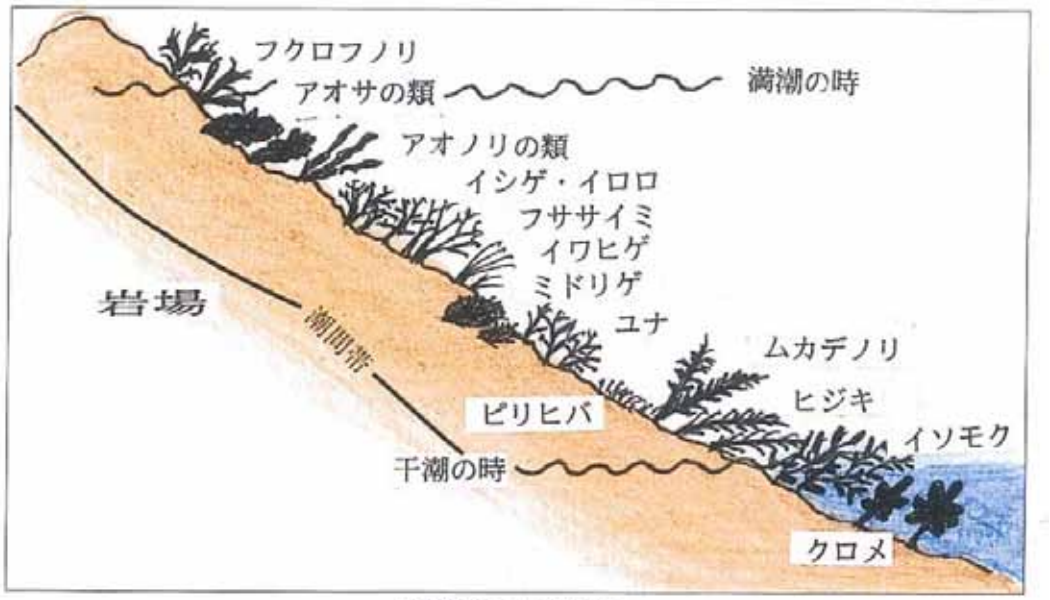


図１　海藻の垂直分布

岩礁についたヒジキ

イソモク

３　各調査地の海藻相と特記される種

蒲戸崎

蒲戸崎には、古代から海藻が多かったと思われます。豊後風土記に「海底多生海そう而長美・・・」の一節があり「天皇即ち最勝海（ほつめ）を採れと勅日う・・・」とありま

す。（ほつめ）が、なんと言う海藻を指しているのか分かりませんが、褐藻のヒロメであったろうと考えています。

調査の結果、緑藻 27 種、褐藻 60 種、紅藻 131 種、合計 218 種が記録されました。一海域でこれほど多くの種が出ることは珍しく、蒲戸崎はすばらしい産地でした。然し残念なことに近年は海藻が激減してしまいました。

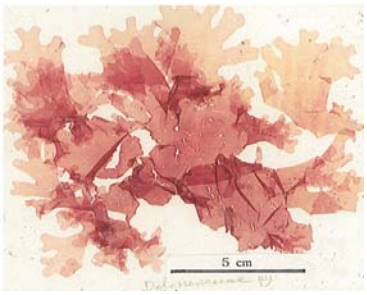
ここでは刺し網で深場に生えている希産種が度々採れます。「コノハノリ亜科の一種」は美しい紅藻で、学者は「瀬戸内海で希に採れるが、雌の個体が採れないので属の決定ができない」と言います。

トゲマダラは本州の太平洋岸と八丈島に分布していて、深い所に生育する希産種と言われています。タマバロニアは生体は鮮緑色ですが標本では退色しています。南西諸島に分布する亜熱帯系の種ですから　蒲戸崎に生育していたのは珍しいことです。

Acanthopeltis longiranmlosa は 2004 年に韓国で新種記載された種ですが、まだ和名はついていません。我が国での採集は極めて希です。

ユルジギヌ属の一種は大形の紅藻で、専門の学者も種名が決定できませんでした。

ヒロメ



コノハノリ亜科の一種

トゲマダラ

Acanthopeltis longiramulosa

ユルジギヌ属の一種

佐伯市古江地区

普通の海岸で一見海藻の生育は見られませんが、これまでに 117 種を記録しています。干潮線の下で採取したクロモズクは、「日本海南部と瀬戸内海に分布する」と記載されていますが、生育が確認された地点は３～４箇所にすぎません。故清原善太郎氏（1889～1965）は 1960 年に大入島日向泊でこの種を採集しています。

大形で美しいアヤニシキは漁船のブイに付着していました。手元にヤタベグサの標本を保管していますが、これは清原善太郎氏が「昭和 3 年 8 月 24 日、西上浦」で採集したものです。西上浦と言っても外海側の古江か晞干だと思いますが、今は生育の確認ができていません。現在この種は宮崎県の青島付近にのみ生育している希産種です。

清原氏は蒲江の入津湾でもこの種を記録しています。

クロモズク

アヤニシキ

ヤタベグサ

興人の浜

打ち上げ採集で普通種 36 種を記録しています。

2010 年 7 月、浜一面に緑のジュータンを広げたようで、渚では厚さが 25 ㎝ほどになっていました。これはアオサの一種ミナミアオサが大量に発生したためで、このような状態を小規模ですがグリーンタイドといいます。

興人の浜のグリーンタイド

ミナミアオサ

大入島北部

岩礁が多く所々でモ場（ガラモ場）が発達しています。モ場の構成種はアカモクやヤツマタモク、ジョロモクなどです。

アカモク

ヤツマタモク

ジョロモク

鶴見梶寄

鶴見の沿岸では、辰の口鼻から海岸沿いに下梶寄まで、断続的にモ場（ガラモ場）が見られます。モ場は魚やイカの産卵場所となり、また甲殻類など魚のエサになる小動物が多いので稚魚の安全な生育場所です。更に水質浄化のはたらきもあり、モ場は水産上極め

て重要です。（図２）

梶寄のタイドプールにはミドリゲが生育していました。体は糸状で団塊になっています。ミドリゲは暖海性の種で、本邦沿岸では希に見られる種です。

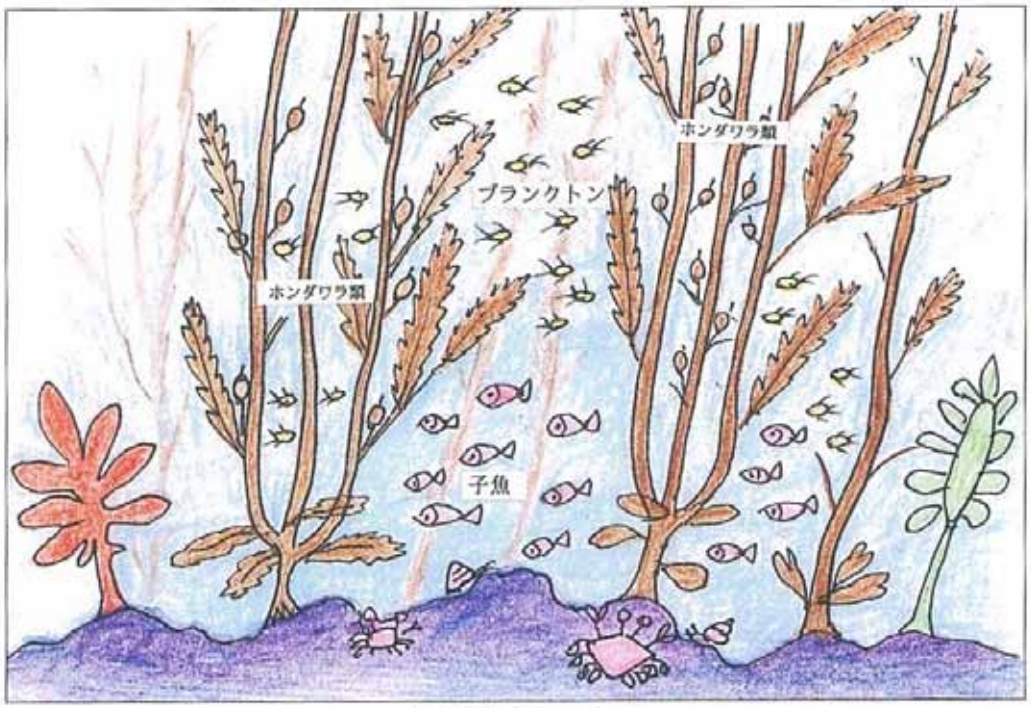


図２　「モ場」のようす

梶寄のタイドプール

ミドリゲ

蒲江越田尾から波当津までの海岸

越田尾の浜から森崎近くまで、春にミナミアオサが大発生してグリーンタイドができます。アナアオサは岩などに丈夫に付着しているが、ミナミアオサは付着力が弱く、成長を始めると基物から離れて、浮遊しながら成長し１ｍ以上の大きさにもなります。このよう

なアオサ類の大発生は海水の富栄養化が一因と言われます。

越田尾の南側の浜はマクリ（海人草と言われ、昔は駆虫薬に用いられた）の産地でしたが、今は埋め立てなどにより姿を見ることはできません。

越田尾から 波当津までの岩場ではマジリモク、ツクシモク、フタエモク、シロコモクなどの暖海性のホンダワラ類が見られます。またヨレモクモドキによってできたモ場も発達しています。

台風の後に丸市尾の浜でヤバネモクとタマキレバモクを拾ったことがあるが、これらのホンダワラは亜熱帯の種で、南西諸島から黒潮により運ばれてきたものと思われます。

マクリ（海人草）

マジリモク

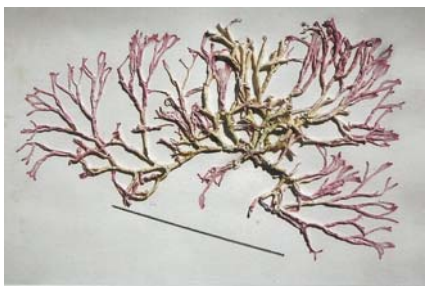
ヤバネモク

深島・屋形島

深島で 94 種、屋形島で 117 種を記録しています。深島で採れたイシハダは、南西諸島と小笠原に分布する亜熱帯系の珍しい種です。コナハダも暖海性です。タイドプールには南方系のホンダワラの一種キレバモクが生育しています。また、岩礁はフタエモクに覆われています。

岩の上に平たく付いているハイミルモドキは、やや北方系の種で深島に生育するのは不思議だといえます。

屋形島のタイドプールには、半ば砂に埋もれた暖海性のクサビガタハウチワやヒメイチョウが見られて南海的です。また、岩上に生育するトゲノリはこの島が北限分布と言われます。



イシハダ

キレバモク

トゲノリ

おわりに

「佐伯の殿様、浦でもつ」と言われましたが、海産物として海藻も重要であったと考えられます。昔、海産物の問屋を営んでいた某店店主の私信によると、佐伯で海藻が如何に多量に採れたかが分かるので紹介します。

「長島川では干潮時川面はオゴノリ（寒天原草の一種）アオサ、アオノリで敷きつめられていたー 中略ー芳島の川州はアオノリの大量の干場で壮観であった」。また「終戦直後、各浦からの出荷量は、テングサ、オニクサ、ヒラクサ、イギス、オゴノリ等、蒲江 3000 貫余、大島 1000 貫余、鶴見 2000 貫余、四浦（蒲戸、浪太含む）3000 貫余、 米水津 2000 貫余、合計 11000 貫余であった」。「番匠川河口のオゴノリは 8000 貫余、ヒジキは各浦で多量産出し合計 4 万貫余であった。その他フノリは各浦で合計 3000 貫余、建築用海苔（一ツバ、マキノリ、サクラノリ、オキナノリ等）は 7000 貫余、またクロメ（食用）、トッサカ（食用）等も産出した。中でも希少価値である海人草は、蒲江越田尾にのみ発生し 15 貫余と少量であったが、大阪の薬問屋垂涎の海人草は超高値であった。」とあります。佐伯の海が海藻の豊富な、より豊かな海になるよう願っています。

参考文献

岡村金太郎；1907－1942。日本藻類図譜、1－7 巻、風間書房。東京
神田　正人；1993、大分県 蒲戸崎の海藻、南紀生物 35（１－2）
神田　正人；2000、鶴見町の海藻、鶴見町の自然 61－73
神田　正人：2006、大分県の海藻、勉強堂美術精版社　佐伯
清原善太郎；1958、蒲江町沿岸産海藻目録、蒲江高校研究録・付録（謄写印刷）
清原善太郎；1959、県南に於ける海藻類、大分県高等学校文化連盟科学部臨海実習資料
清原善太郎；1969、深島の海藻、大分県理科教育研究会第 10 回採集会資料
吉田　忠生；1998、新日本海藻誌、内田老鶴圃　東京
吉田　忠生他；2005、日本産海藻目録、藻類 53（3）179－228
Lee,Y･Kim,B;2004　韓国の Jeju 島における新種 *Acanthopeltis longiramulosa* Sp,Nov(紅藻テングサ目)について　藻類 52（2）126－127